

迷信

比護 歩夢

〔本編のあらすじ〕

裕二の母は何かにつけては迷信を持ち出し、家族を巻き込んでいた。裕二はそんな母のことが好きで、母の迷信を破ることはしなかった。裕二は迷信を信じていれば良いことが起こると信じていた。しかし良いことは起こらない。裕二は学校が上手くいかないことへの苛つきを母にぶつけてしまう。

〔特記事項〕

信じるという行為に意味があり、迷信が気休めになる人もいるのかもしれない。

〔本編の文字数〕

4938字

裕二は幼い時から肌が弱かった。肌の乾燥を抑えるために、お風呂上がりには保湿用のクリームを体に塗らなくてはならなかった。そのため裕二は、風呂に入ることをとても嫌がった。身体中がベトベトになり、痒くなる感覚が不快だったのだろう。

特に裕二は手のひらをよく痒がった。手のひらが痒いと、何かで遊んだりして気を紛らわせることもできない。そんな裕二の痒みを救ったのは、母の美咲であった。

「ゆうじくん。ヨーロッパだと、手のひらが痒くなった人にはお金が入ってくると言われているのよ。」

と、おおよそ五歳やそこらの子供にアドバイスをする内容ではないことを言い出したのだ。それ以来、裕二は痒みを訴えることはなくなった。正確には痒みはあるのだが、それを良いことのように捉えたようだった。

母は古くからの風習や迷信を信じる人だった。どこで知ったのかわからないような言い伝えをたくさん知っていて、家族の誰かが何かした時に、その言い伝えを持ち出しては訂正させるのだった。裕二はそんな母のことが好きだったし、全く身に覚えのないような迷信を聞くことが楽しかった。

しかし、思春期を迎えた頃から、裕二は母の迷信を疎ましく思うようになった。

裕二は一度、本当にそんな迷信があるのか、と母の迷信について調べたことがある。

手のひらが痒くなるとお金が入ってくる、というのは本当だった。

ただし母から教わったものとは少し違っていた。どうやら、お金が入ってくると言われているのは右手が痒くなったときだけで、左手が痒くなってしまうと逆にお金が消えていってしまうようだ。

裕二は、「俺は両手が痒かったんだからプラマイゼロじゃないか」と母の良い加減さを笑った。なるほど、うちにお金貯まらないわけだ。

それでも裕二は迷信を否定したりはしなかった。母と衝突することが面倒だったからだ。母の迷信に従って、裕二は高校生になった。

いつから真面目という言葉がそのままの意味で使われなくなったのだろう、と裕二は思った。裕二に対して使われる「真面目」という言葉は、表向きにはいい言葉だとしても、その背景には「ああ、はいはい、そういうタイプね。」という棘が潜んでいるように感じてならない。

裕二にとって、学校の休み時間は苦痛で仕方なかった。明日のテストに向けた勉強をしようと参考書を開くが、今ひとつ捗らない。家や学校の外でならイヤホンをしているところだ

が、学校が終わる時間までスマホは自分のロッカーに入れっぱなしにしなければならぬ。後ろの席では自分が生涯関わらないようなタイプの人間が、彼女とどこまでヤツたとか、そういう話がとめどなく繰り広げられている。ほんの何年か前まで女子と話してるやつを非難していたのに人間の成長というのは早いものだ、と達観したふりをして自分を守る。

裕二には恋人はおろか、友人もほとんどいなかった。

しかし、裕二は正直、勉強する上でそれらは必要ないと考えていた。

とはいえ、根本的にここに通っている学生達とはタイプが違うのではないかと時々思う。裕二の高校は、この地域の中でも比較的偏差値が高い高校だが、通っている生徒は「優等生」という感じではなく、やさぐれている人が多いように感じた。努力しなくてもなんでも卒なくこなせるタイプの集団なのかもしれない。裕二はかなりの努力をしてこの高校に入った。

意味のある会話をすることはほとんどない。それを言うと、そもそも会話をするのが少ないのではないかとツツコミを入れられそうではあるが、裕二にとつて物事に意味を見出せるかどうかは重大な問題だった。

全ての授業を終えて、裕二は帰路に着く。面白みのない日々は毎日のように繰り返される。唐突に、迷信を守って、これか。と思った。

「テストの前は髪を洗っちゃダメみたいよ」

リビングで勉強をしている裕二に、母が皿洗いをしながら言った。

「それどこの迷信なの」勉強中にどうでもいい話をしないでほしい。裕二は自分の部屋を持っていない。そのため、家で勉強する時はリビングの机で行っている。こうやって母に話しかけられるのが嫌で、普段は図書館で勉強をしている。だが残念ながら、今日は図書館が休館日なのだ。

「韓国の言い伝えみたいよ。覚えたことを忘れちゃうって言われてるの。」

「ふーん」裕二は適当に会話を終わらせたかった。

「でもあんたは右眉毛の端に黒子があるからね。きつといろんな運気を呼び込むよ。」

裕二は無視をした。なんだか今日はイライラしてしまう。

「裕二が生まれた時、幸運の黒子があることがわかってすぐ嬉しかったなあ。」

「ちよつと今勉強してるから黙ってくんない？」ついイライラした言い方してしまった。

「あらごめんさいね。でもそんなに怒ることないじゃない。」

「：前から言ってるけど、そういう根拠のないことで俺は元気付けられないから。」

「でも古くからの言い伝えなのよ？本当に効果があった人だってたくさん！」

「だったら、その迷信を律儀に守ってる俺に何にも良いことがないのはどう説明するんだよ。」自分でも見当違いな怒りなことぐらいわかっていた。それでもイライラした気持ちは

どうしようもならなかった。母が心配そうな、悲しそうな顔をする。

「何かあったの？それにまだ良いことが起こらないって決まったわけじゃないじゃない。」

「迷信なんて意味ないんだよ。」

「そんなことないわ。」

「いや、そうだよ。なんだったら俺が証明してもいい。」

裕二は、自分は何をムキになっているのだろうと思った。しかしなんとなく後に引くことはできなかった。腹が立ってたのも要因の一つだが、自分が薄々感じてたものを、ようやく発散することができたからであった。

「∴裕二は大事なことがわかってないよ。」

「どうだろね。」

裕二にとって、明日の今回のテストの出来なんてどうでもよかった。

それよりも、いかに母の迷信が胡散臭いということをやって証明するか、ということが思考の大半を占めていた。

普通に考えてしまえば、迷信とは逆のことをすれば良い。簡単なことだ。

その日の夜、裕二は覚えたことを忘れるほど入念に髪を洗い、口笛を吹き、爪を切った。夜に爪を切るとは「世詰め」、すなわち短命を彷彿とさせるため、縁起が悪いこととされている。さすがに気分が良いことではなかったが、母への対抗心がモチベーションとなった。

裕二には、悪いことなんて絶対に起こらない、という自信があった。

結論から言うと、裕二の考えは簡単に裏切られた。ただそれは、迷信を破ったからとか、そういう小さな話ではなく、しつかりとした理屈があるものだった。

新型コロナウイルスの感染拡大は、裕二のだけでなく全ての人に猛威を振るった。

裕二が迷信と逆のことをした日の次の日、学校の朝会で、これからしばらくは、学校は短縮授業か休校になるということが伝えられた。誰も口には出さなかったが、生徒の歓喜の雰囲気というのは肌で感じられた。

裕二は、新型コロナウイルスの存在はもちろん知っていたが、自分達の地域にまで広がっているということに驚いた。学校が休みになること自体は悪くないなど正直思ったが、同時に母と喧嘩してしまったことを思い出した少々気が重かった。

その日はすぐに帰らされた。

家に帰ると母が昼食の準備をしていた。母は専業主婦で基本的に家にいることが多い。

「おかえり〜」普段と変わらないように接してくれる母を見ると、昨日必要以上に怒ってしまった自分のことが情けなくなる。

「ただいま」裕二も普段と同じように接した。

「学校どうなるって？やっぱりお休みになる？」

「そうだね。休校になるか、短縮授業だっさ。」

「そうだよねえ…じゃあしばらくお昼いるね。」

「うん。お願いしてもいい？」

「もちろん良いわよ。それぐらいしか楽しみなくなっちゃうものね。」

確かに外出できないと、家での食事が楽しみのお大半を占めるかもしれない。

テレビをつけると、どの局もコロナの話題でひっきりなしだ。裕二が今見ている番組では、コロナウイルスに関するデマについて取り扱っていた。

こういうデマを流す連中というのはいつの時代もいるのだなと裕二は思った。福田村事件から東日本大震災まで、こういった危機的状況に陥ると必ずと言って良いほどデマが発生する。そう考えると、本質的な人間の問題は変わらないのだなと実感した。

デマに伴って、さまざまな陰謀論が囁かれた。コロナウイルスは中国で人工的に作られたウイルスだとか、5の電波がコロナウイルスの蔓延に関わっているなど様々だ。

裕二はそんなデマや陰謀論を鼻で笑ったが、同時に、母からそう言った類の話は聞いたことがないなと思った。迷信好きの母はそう言った陰謀論なんかも好きなのではないかという勝手な偏見を持っていた。

「母さんってこういうことには興味ないの？」裕二は半分冗談のような、半分本気のようなそんな気分で聞いた。

「こういうやつ？ないない！私をなんだと思ってるのよ。」冗談だと思っているのか笑いながら母は答えた。

「いやでもさあ、迷信だつてまあデマとか噂話みたいなどころあるじゃない。だからそういう面白い話だったら好きなのかなって。」裕二は言葉を選びつつ聞いた。

「うーん。私が信じてる言い伝えと、こういうデマとか陰謀論？っていうのは似ているように似てないと思うのよね。」

口調こそ普段と変わらないが、真面目に話そうとする雰囲気を感じ取ったため、裕二は姿勢を良くした。

「どんなところが違うの？」

「私は、悪意のある噂話は嫌いな。こういう人を傷つけたり、困らせるようなね。逆に人のことを思いやるような噂話は好きなのかも。」

裕二は意外だった。母の迷信にそんな共通点があったのだろうか。

「…テスト前に髪を洗わないのも思いやりのある迷信なの？」

「まあ思いやりかはわかんないけど、ポジティブではあるじゃない？」

「…でも結構訳わかんないのも多いよね。迷信って。」

「そうそう。だから私の信じたものだけ信じるの。特にポジティブなやつ。」

「ポジティブな迷信って例えば？」思わず聞いてしまった、と裕二は思った。母が饒舌になるに決まっている。

「一番好きなのは『妊婦さんがいる家庭の夫が漁に出ると不幸になる』かしら。」

「え」と思わず聞いてしまった。

「母さんが妊娠してるときお父さんなんかやったの？」

「違う違う！お父さんとは関係ないよ。」

裕二は、何かあったのではないかと勘繰ってしまつたが何もなくて一安心した。確かに温厚な父が母のことを置いて何かやらかしたりすることは考えづらい。

「でもなんでまたこの迷信が一番好きなの？」

「ほら、この話って妊婦が家にいるなら漁に出て死んで悲しませるな、嫁さんを支えてやれるな話でしょ？迷信の裏にこういう教訓が隠れてるのが良いのよね。」

「なるほどなあ」裕二は母の考え方の核となる部分が少し見えた気がした。でも、どんなに明るく楽しい迷信でも根拠のないものだつてある。

「気休めにしかならないんじゃない？」

「気休めって大事なのよ。」

「でも根拠がないものを信じてなあ」

「そうねえ…根拠がなくても、何かを信じることで得られるものつてあるのよ。」

「それつて？」

「うーん…気休め？」

「やっぱり気休めじゃん。」

「だから言ってるじゃない、気休めは大事なの！」

なぜここまで母は気休めにこだわるのか、裕二は不思議に思った。

「気休めの何がそんなに大事なの？」

「私は人生の大半つて気休めだと思うの。だから大事にするべきつて感じかな。」

「人生の大半？」ちよつと大袈裟なんじゃないかと裕二は思った。

「そう。遊ぶことも、ご飯を食べることも、お酒を呑むことも全部。」

それは、確かに一理あるのかもしれない。人は現実から逃れるために生きるのかもしれないと裕二は思った。

「…わからなくもないよ。」

「でしょ？だから自分の信じたいものを信じて、したいようにするの。」

裕二はもつと母と話すべきだつたな、と自分を恥じた。もちろん、昨日のことも。

「あ、あと一つ好きな言い伝えあるよ。」母が明るく言った。

「どんなの？」

「『その日の喧嘩はその日の内に終わらせないと晩ご飯がなくなる』つてやつ。」

「…ごめんさい。」裕二は顔を赤らめた。